琉球大学学術リポジトリ

『天の牧場』：夢［幻想］から醒めて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲地, 弘善, Nakachi, Kozen メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7053

Ryudai Review of Language & Literature No. 34, 1989

『天の牧場』：夢［幻想］から醒めて

仲　地　弘　善

I

ジョン・スタインベック（John Steinbeck）の第3作『天の牧場』（*The Pastures of Heaven*）（1932）は12章から構成されている。その作品構成に関しては"a group of loosely connected stories"(Moore, 18)、あるいは"the most loosely knit of any Steinbeck's novels"(Lisca, 48)と批評されながらも、作品を個々の短編としてではなく全体として捉えようとする試みがなされてきている。特に、フォーレスト・L・イングラム（Forest L. Ingram）著 *Representative Short Story Cycles of the Twentieth Century: Studies in a Literary Genre*（1971）の影響もあって、『天の牧場』が今や「ショート・ストーリー・サイクル」（"short story cycle"）として脚光を浴び、最近出版されたR．S．ヒューズ（R.S.Hughes）の *John Steinbeck: A Short Story Fiction*（1989）の『天の牧場』を扱った章のタイトルはまさしく"A Steinbeck Short Story Cycle: *The Pastures of Heaven*"となっている。

個と全体との関連についての問題は、スタインベック文学の重要なテーマの一つであり、「潮だまり」（"tide pool"）の海洋生物の観察から海洋生物と人間集団の類似性、特に個と集団の関連性を模索する思考パターンは作品構成の上にも顕現していると言えよう。つまり、個々の物語は"complete in itself, having its rise, climax and ending"(*SLL*, 42）のであるが、全体として配置された場合にはその関連性からまた別の新しい意味が生じてくることをスタインベックは熟知しており、『天の牧場』は読者に「創造的な読み込み」（creative reading）を要求して構成されていると言えよう。その点に関して、イングラムは、

> A story cycle is a set of stories so linked to one another that the readers's experience of each one is modified by his experience of the others. (p. 13)

と「ショート・ストーリー・サイクル」の特性を的確に述べている。

スタインベックが、『天の牧場』を単なる短編の寄せ集めとしてではなく、「ショート・ストーリー・サイクル」として読んでほしいと願っていること、また読者の「創造的な読み込み」を期待していることは、1931年12月のアマサ・ミラー（Amasa Miller）宛ての次の手紙によって知ることができる。

> If the reader will take them for what they are, and will not be governed by what a short story should be (for they are not short stories at all, but tiny novels) then they should be charming, but if they are judged by the formal short story, they are lost before they even start. (*SLL*, P. 51)

この作品構成法は、スタインベックの非目的論的思考（*non-teleological thinking*）及び"breaking through"の概念と深く関わっている。『天の牧場』はエドワード・F・リケッツ（Edward F. Ricketts）の影響をあまり受けていない頃のスタインベックの作品であるから、その作品研究によってスタインベック文学の特性を把握することができる。

『天の牧場』の個々のストーリーの中で"breaking through"の概念が織り込まれているのは第3章のエドワード・ウィックス（Edward Wicks）の物語ばかりであり、その場合にしても"breaking through"の概念は微に感じ取られる程度である。しかし、イングラムが提示している「ショート・ストーリー・サイクル」として『天の牧場』を再検討してみると、個々のストーリーが互いに関連し合っていて、読者は個々のストーリーの読書体験に加えて作品の全体像へ"break through"するように装置が施されていることに気づく。「潮だまり」に譬えられる「天の牧場」の住人たちの生態観察を通して、読者は挫折した「ア

メリカの夢」(American dream) の実体を見せられることになり、その夢から醒めて自然のリズムに適った生き方の可能性が暗示される。また、そのような生き方が文明社会の中で脆くも阻まれてしまう現実もドラマ化されており、読者は夢の持つ短所と価値について再考を求められていると思う。

II

出版された当初から『天の牧場』には「夢と現実のコントラスト」、「幻想による生の実現」、「社会による個人の圧迫」と言うテーマがあると指摘されている。確かに個々の物語にこのようなテーマが部分的に散見されるが、作品全体を統一するテーマとは言えない。夢あるいは幻想から醒めて現実に直面する瞬間が描かれていて、読者はいろいろと考えさせられる。作品全体を統一する方便としてマンロー家 (the Munroes) の人たちが登場し、彼らによって「天の牧場」の人たちに呪い〔禍〕が拡散されていくことは、作者自身も言及しているし(*SLL*, p. 43)、スタインベック研究者たち、特に、ピーター・リスカ (Peter Lisca)、ジョセフ・フォンテンローズ (Joseph Fontenrose)、ウォーレン・フレンチ (Warren French) などによって詳細に検討されている。リスカが"most〔critics〕have missed the importance of the Munroe family" (p. 59)と指摘し、フォンテンローズが"the curse is the unifying theme" (p. 21)と指摘することによって切り開かれた『天の牧場』批評の鉱脈は、更にフレンチの次の言及によって、一層深い地層に突き当たることになる。

> The Munroes are never really responsible in any conscious sense for the tragedies they precipitate; they are always well-meaning. Their curse, it soon becomes evident, is that they never know the right thing to say or do; therefore they have the calamitous effect of upsetting the precariously maintained equilibrium of insecure people. (p. 57)

夢を追い求めてであるにせよ、幻想を抱いてであるにせよ、「天の牧場」で平衡を保って平和に生きようとしている20家族の集団の所へ新しい家族、マンロー家が移ってきたのがきっかけでいろいろな禍が「天の牧場」の住人に降りかかると言うモチーフは、スタインベックが海洋生物の生態観察に興味を持っていること、及び文明を運ぶアメリカ人の進歩への信奉に懐疑的であることを考え併せるならば、『天の牧場』批評の出発点であり、作品解釈のポイントでもあると言えよう。

マンロー家の与える禍が「天の牧場」の住人たちにとって悲劇的な結末に至るものなのか、再生への"a moment of truth"(Fontenrose, p. 25; Hughes, p. 91)に直面する事になるものなのかは、議論の分かれるところであるが、マンロー家触媒（the catelyst）論はかなり定着している。つまり、マンロー家は『天の牧場』の個々の物語の登場人物たちの平和な生活に変化を与えるきっかけにはなっているが、それはあくまでも触媒的な役割であり、むしろ焦点はそのストーリーのヒーローたちの生き方と彼らを取り巻く社会的環境の関連性、言わば生態の観察にあると言えよう。しかし、マンロー家の果たしている役割と「天の牧場」と言う「潮だまり」的場所を十分に理解していなと個々のストーリーの意味を読み誤ることになるかもしれないし、作品全体の構造及び主題を見失ってしまうかもしれない。

III

「天の牧場」はカリフォルニア州モンテレ（Monterey）の南約12マイルのところにある実在の地名コラール・デ・ティエラ（Corral de Tierra；地の囲い）をモデルにした場所である。このことについて、スタインベック自身が言及しているのだが（Lisca, p. 56)、地（Tierra）を天（Cielo/Heaven）に置き換えて小説のタイトルにしたのは、いかにもスタインベックらしいアイロニーである。（注１）美しく、肥沃な、天国とも思える景観の地、「天の牧場」は序章のスペイン人の伍長や終章の観光バスの乗客たちのように遠くから眺めると理想的な場所として映る。そこに住む人々のドラマは、それとは裏腹に悲劇的転落、

つまり「天の牧場」からの追放である。その悲劇的転落に関与することになるマンロー家の人々の行為は、必ずしも悪意に満ちたものではなく、むしろ博愛主義の慈善行為と言えるものだが、それが「天の牧場」の住人たちの転落のきっかけになるところにアイロニーがあり、読者は考えさせられるのである。

第1章の序章において、「天の牧場」がスペイン人伍長によって発見され、命名された顚末から語られる。そのスペイン人伍長は、文明化を嫌って逃げ出した20人のインディアンたちを軍隊の命令を受けて捜索し、彼らを引っ捕えて、帰路についていたのであるが、偶然、この山間の素晴らしい景勝の地「天の牧場を」発見し、馬から降り、帽子を脱いで、"Holy Mother! Here are the green pastures of Heaven to which our Lord leadth us." (*PH*, P. 2) (注2) と思わず呟いたのである。それは、旧約聖書の中でモーゼに率いられ、エジプトから脱出してきたユダヤの選民たちが約束の地カナンを目の当たりにしたときの感慨に等しく、また『怒りのぶどう』の中で、ジョード家 (the Joads) の人々が砂漠を越え、山を越えて、初めてカリフォルニアの果樹園を見下ろした時の光景を連想させる。そのスペイン人伍長は出来れば余生をそこで過ごせたらと思い、是非戻って来たいと思うのであるが、皮肉なことにインディアン女に梅毒を移され、他の人々への感染を恐れた同僚たちによって小屋に閉じ込められてしまう。そのためにこのささやかな夢は遂に実現することはなかったのである。それは1776年頃の出来事であった、と語られている。

その後、この「天の牧場」には数家族が住み着き、果樹を植えつけたが、土地の所有権のことでは争いが絶えなかった。発見されてから百年後には20家族が住むようになり、マンロー家の人々が移り住んでくる1920代の前半の頃までは平和に、裕福に暮らしていたことが語られている。

スペイン人伍長の「夢」が皮肉に響くのは、文明と言う利器で武装し、自分の意志を押しつけようとしている人間たちの「夢」は脆いものであり、儚いものであることが、第3章以下の9つのストーリーで詳細に展開されていることによって、相乗効果を高めていくからである。第3章以下の個々のストーリーによって「天の牧場」の住人に降りかかる災難あるいは悲劇の結末を知っている読者にとって、終章の短い語りは皮肉とユーモアに満ちていて、『天の牧場』

のフィナーレとして誠にふさわしい場面である。

『天の牧場』と言うタイトルの「天」の中に含まれているアイロニーは、第1章においてスペイン人伍長の「夢」と悲惨な最期の現実を語ることにより、一貫性のあるトーンになり、この作品に持続性と統一性を与える効果を与えてくれる。その点に関してリチャード・アストロ(Richard Astro)も *John Steinbeck and Edward F. Ricketts: The Shaping of a Novelist* (1973) の中で次のように言及している。

> *The Pastures of Heaven* is an ironic novel (as the title suggests), and the irony consists in Steinbeck's conclusion in each of the ten separate yet interrelated stories that while man's highest function on earth may be to break through to an understanding of the cosmic whole and to benefit the social order, his fallibility often undermines his potential greatness. (pp. 96-97)

夢と現実のコントラスト、夢［幻想］を抱いている「天の牧場」の住人たちが現実と遭遇する際に、夢［幻想］から醒めて自分の置かれている状況を認識し、その状況の中で生きていく智恵を獲得できるのか、あるいは何時までも現実に盲目であり続けるのかが問われているのだが、「天の牧場」の住人たちはほとんど「現実」に打ち負かされて、「天の牧場」から出ていくことになる。読者は、「天の牧場」の住人たちの生態観察を通して、現実の世界における自分自身の生き方に"break through"することを迫られているのである。

第12章の最終章で、観光バスに乗った一団の人々が「天の牧場」が見下ろせる尾根の頂上で、バスを降り、そのすばらしい景観の地「天の牧場」を鳥瞰して、そこに住んでみたいと口ずさむのは当然の反応である。しかし、序章のスペイン人伍長の「夢」の顚末を既に読み、第3章以下の9つのストーリーを読んできた読者には、「天の牧場」の現実を知らない観光客たちの発言が皮肉に響く。

この「天の牧場」で新しく生活をやり直すためにやって来たのが、マンロー

家であり、作品は第2章で彼らが住むことになるバトル農場につきまとっている「呪い」(“curse”)の伝説とマンロー家のこれまでの生活、及び家族ひとりびとりの紹介がなされる。

先ず、バトル農場がどうして「呪い」のかかった場所になったのか、あるいは「呪い」がかっていると「天の牧場」の住人たちに噂されるようになったのか？スタインベックは本気で「呪い」を信じ、超自然的な噂話に興味を示しているのだろうか？「呪い」の実体は何なのだろうか？これらの疑問に答えることによって、作品全体の中におけるマンロー家の存在の意味もはっきりしてくるものと思われる。

バトル家は2代にわたってバトル農場に住み着くことになる。初代のジョージ・バトル（Goerge Battle）は東部からやって来て、「天の牧場」に安住の地を求める。彼はお母さんから農場を買い、家を建てる資金を受けていたが、家が完成してお母さんを呼び寄せたところ、旅の途中で彼女は死去する。彼の結婚した35歳になるオールド・ミスのマトル・カメロン（Mertle Cameron）は癲癇持ちであり、宗教的狂信者であるが、彼はそのことを気に留めない。しかし、一人息子ジョン（John）を産んでから彼女の狂信性はいよいよ悪化し、家に2度火を点けようとした後で、サンノゼ（San Jose）の精神病院へ送られることになる。その後のジョージの生活は孤独で、陰惨なものとなる。「天の牧場」の住人たちはバトル農場に近づかなくなり、ジョージは老齢と病気のため65歳で死去する。

ところで、「天の牧場」の住人たちにとって、バトル農場が「呪い」のかかった場所として噂されるようになるのは、母の癲癇持ちと宗教的狂信性を受け継いでいる息子のジョンの身辺に起こる恐ろしい事件の後のことである。ガラガラ蛇を悪魔と同一視するジョンは、ある日の夕暮、自分の庭の茂みの中にいるガラガラ蛇を退治しようとして、逆に喉元を3度噛まれて即死する。ジョンの死体に禿げ鷹が舞い降りる光景を見て、「天の牧場」の住人たちは恐れ、「呪い」の噂が広まる。それから10年後、マストロヴィックス家（the Mustrovics）の人々がこのバトル農場に住み着くことになるが、彼らがやって来るのも突然のことであり、謎めいていたが、2年後急に蒸発する。この事件によって、バト

ル農場は「天の牧場」ではいよいよ「呪い」のかかった場所として恐れられるようになるのである。

このバトル農場を買い取って、そこに住むようになるのがマンロー家の人々である。マンロー家の人々が第3章以下の9つのストーリーにおいて「天の牧場」の住人たちの運命に深く関わっていくことが『天の牧場』を1つの小説作品として統合している要素の一つになっている。第3章のエドワード・ウィックス（Edward Wicks）の物語では、長男のジミー（Jimmy）と一家の主人であるバート・マンロー（Bert Munroe）が関わっているし、第4章のツラレシート（Tularecito）の物語、及び第5章のヘレン・ヴァン・デヴェンター（Helen Van Deventer）の物語ではバートがまた関わっている。第6章のジュニアス・モルトビー（Junius Maltby）の物語では、マンロー夫人が関係し、第7章のロペス姉妹（the Lopez sisters）の物語、第8章のモリー・モーガン（Molly Morgan）の物語、及び第9章のレイモンド・バンクス（Raymond Banks）の物語ではバートが関わっている。第10章のパット・ハンバート（Pat Humberts）の物語及び第11章のホワイトサイド家（the Whitesides）の物語では、娘のメイ（Mae）が関係しているが、ホワイトサイド家の物語においては、再度バートが深く関わっている。『天の牧場』におけるマンロー家の役割はシャーウッド・アンダースン（Sherwood Anderson）の *Winesburg, Ohio*（1919）の主要登場人物であるジョージ・ウィラード（Goerge Willard）の役割に似たことろがあると言われる所以である。（注3）

バートはバトル農場を住み良い場所に変えていく。これまでの自分の人生が不運の連続であったので、ここに辿り着いてバートはやっと自分につきまとっていた不運〔呪い〕から自由になれると感じている。従って、彼らの到来を好奇の目で見ている「天の牧場」の住人たち、特に、親しくなった食料雑貨店の主人T．B．アレン（Allen）に“We always kind of thought that place was cursed. Lots of funny things have happened there. Seen any ghosts yet?”（PP. 14—15）と冗談交じりに聞かれても、笑って済ますことが出来るのである。おまけに、バートは、

"... Well, I just happened to think, maybe my curse and the farm's curse got to fighting and killed each other off. I'm dead certain they've gone, anyway." (p. 15)

と言って、店にいる人々を笑わせる。自分にかかっている「呪い」とバトル農場にかかっている「呪い」が一緒になって消滅した、と楽観的に言うバートに対し、アレンの次の言及は単なる冗談以上の意味を持って第3章以下の9つのストーリーと関わっている。

"... Maybe your curse and the farm's curse has mated and gone into a gopher hole like a pair of rattlesnakes. Maybe there'll be a lot of baby curses crawling around the Pastures the first thing we know." (p. 15)

つまり、2つの「呪い」が一緒になって「天の牧場」の至るところにその「呪い」が拡散することになるだろうと予言しているのだ。アレンにしてみれば、それはあくまでも冗談であるが、この拡散の可能性こそ読者に9つの物語を結びつけさせる伏線の機能を果たしていると言えよう。

確かに、マンロー家の人々の挙動あるいは発言が、「天の牧場」の住人たちの災難に直接的に、あるいは間接的に関わっているのは事実だが、これが彼らの転落の「真の原因」"the true cause")(Hughes, p. 91) ではない。「真の原因」は、むしろ彼ら自身のこれまでの生き方に内在していたのであり、マンロー家の人々はそのきっかけをつくっているにすぎない。この点に関して、フォンテンローズは、

In each (story) the principal character had founded his tranquil life in the valley upon an unhealthy adjustment, an evasion of reality, an illusion, or an unrealizable dream; and a deed of a Munroe forced him face the truth, if but for a moment. (p. 25)

とマンロー家の人々の行為を積極的に評価している。(注4)

しかし、スタインベックの関心は決してマンロー家の人々にあるのではない。マンロー家の人々はむしろ風刺される側にあり、個々の物語にコンテキストを提供しているに過ぎない。これに関連して、リチャード・F・ピタースン(Richard F. Peterson) は、

> Steinbeck's sympathies are with these characters rather than with the world of the Munroes, but his interest is in exploring the values or weakness contained within their dreams. (p. 98)

と指摘している。つまりスタインベックの関心は「天の牧場」の住人たちの抱いている夢の価値とその脆さを検討することにあるのであって、外面的な「呪い」の存在を本気で信じているでもなく、「呪い」の媒体としてのマンロー家の人々に関心があるのでもないことははっきりしている。夢［幻想］に囚われている人々の実体と、夢［幻想］が現実の前で脆くも崩れる瞬間を映像として読者に提供しているのだ。夢が脆くも崩れる瞬間において個々のストーリーのヒーローたちは"breaking through"のチャンスが到来するのだが、残念なことにそのチャンスは実を結ぶことはない。悲劇において、主人公が自己認識に到ることなく死んでいく場合、観客の側でそのカタルシスを体験するのと同様に、『天の牧場』においては各ストーリーのヒーローたちがたとえ"breaking through"に到らなくても、読者の側でその体験をさせられる構成になっていると言えるのではないか。

以上の観点に立って、次に第3章の「エドワード・ウィックスの物語」、第6章の「ジュニアス・モルトビーの物語」、及び第11章の「ホワイトサイド家の物語」を選んで論じていくことにしたい。

IV

リスカに従って、「天の牧場」の9つのストーリーを3つのグループに分類し

てみることにする。(注5) 第1のグループは、第3章の「エドワード・ウィックスの物語」、第5章の「ヘレン・ヴァン・デヴェンターの物語」、及び第8章の「モリー・モーガンの物語」である。このグループに共通しているテーマは「幻想」とその崩壊である。特に、第3章の「エドワード・ウィックスの物語」をこのグループから選んだのは、この物語の中には"breaking through"の概念が僅かではあるにせよ虚構化されているからであり、またこの物語は作品全体の縮図的役割を果たしているからである。

第2のグループに属するのは、第4章の「ツラレシートの物語」、第6章の「ジュニアス・モルトビーの物語」、及び第7章の「ロペス姉妹の物語」である。このグループに共通しているテーマは、自然のリズムには従っているのだが社会的には受け入れられない人々に対して、社会が介入するために引き起こされる夢の崩壊である。その典型的なものが第6章の「ジュニアス・モルトビーの物語」である。

第3のグループは、お互いに共通しているテーマがあるためではなく、むしろそれぞれ異なったものの寄せ集めであるが、第1のグループと関連しているものもあり、第2のグループと関連しているものもある。第9章の「レイモンド・バンクスの物語」、第10章の「パット・ハンバートの物語」、及び第11章の「ホワイトサイド家の物語」がこのグループに属する。その中で、第11章の「ホワイトサイド家の物語」を選んだのは、この物語が作品全体をしめくくるのに一番適しているからである。

さて、第3章「エドワード・ウィックスの物語」は、この物語の主人公である「シャーク」("Shark"鮫)・ウィックスと呼ばれている男の物語である。生涯に500ドル以上は持ったことのないこの男が、「天の牧場」の住人たちからは大金持ちの投資家だと思われており、自分自身も架空の帳簿をつけたり、「天の牧場」の有力者たちに融資の相談を持ちかけたりして、嘘で固めた虚構の生活を楽しんでいる。彼には、妻と娘が一人いる。妻のキャサリン (Katherine) は、結婚した当時は奇麗ではなかったが、溌剌として活気に満ちた女性であった。然し、幻想を抱き、妻には相談を持ちかけもしない夫との生活を重ねているうちに、キャサリンはただ黙々と働くことが人生であるような生活に慣れきって

しまう。娘のアリス（Alice）は類稀な美人に生まれついたが、知能の発達が遅れているために、父親である「シャーク」・ウィックスは彼女が自分で自分の身体を守ることか出来ないと思っている。彼女が思春期に達するとそのことが「シャーク」・ウィックスの心配の種となり、娘を宝物のように大事にする。そして異常とも思える言行に端を発して、彼の虚構の生活はその実体を暴露されることになり、崩壊するのである。

自分は「金持ちである」と言う幻想と娘を「ドレスデン磁器の花瓶」(“a Dresden vase”)(p. 24)のように壊されないように大事に守りたいという幻想が、マンロー家が「天の牧場」に移住してくることによって打ち砕かれるというのがこのストーリーの大筋である。確かに、マンロー家の長男ジミーは都会育ちであり、女の子たちとの遊びにかけてはあまり好ましくない噂が、既に「天の牧場」に流布しており、また学校で行われたダンス・パーティーでジミーが初めてそのような催しものに参加したアリスを誘い込み、柳の木の下でキスをしたことが事件の発端となる。そしてライフル銃でジミーを殺そうとした疑いで、バート・マンローに告訴され、一万ドルの保釈金を要求されて、実はお金がぜんぜんないことが分かってしまうのである。それゆえに、マンロー家のジミー及びバートが「シャーク」・ウィックスの破滅に直接関与しているようにみえる。

しかし、フォンテンローズも指摘しているように（p. 11－12)、「シャーク」がオークランドの叔母の葬儀から帰って、T．B．アレンの食糧雑貨店に立ち寄った時、彼の留守中の出来事、つまりジミーとアリスがダンス・パーティーでキスをしていたという噂を不用意にも洩らし、しかも店にあるライフル銃に「シャーク」の視線を向けさせたのはアレンであることを考えれば、マンロー家のジミー及びバートたちよりもアレンの行動が非難されるべきである。ここで、もう一歩踏み込んで「シャーク」の破滅の原因を検討してみると、“the true agent of Shark’s downfall was Shark himself” (p. 22）であることがはっきりする。マンロー家のジミー及びバート、あるいはアレンは外的要因にすぎず、「シャーク」自身の中に破滅の要因が内在しているのだ。マンロー家の人々は、むしろ“a moment of truth” (p. 25）を与える機能を果たしていると言えよう。

破局は痛ましいものだが、“a moment of truth”でもある。それは悲劇の場

合にも起こる認識の瞬間である。この点に関して、フレデリック・ブレイチャー（Frederick Bracher）は、

> To be aware of the whole thing and accept one's part in it is, for Steinbeck, the saving grace which may lift man out of the tide pool. (p. 196)

と言及している。自分の置かれている状況を直視し、ありのままの現実を躊躇することなく受け入れること、つまり"the love and understanding of instant acceptance"が"breaking thruogh"の概念のエッセンスであり、スタインベックの関心がそこにあることを示唆しているのである。

幻想を打ち砕かれ、絶望の淵に叩き落とされた「シャーク」を励まし、立ち上がる勇気を与えるのは、それまでは従順に黙々と生きてきた妻のキャサリンである。廃墟の中から舞い上がる不死鳥のように、彼女の身体の中に新しい力が湧き起こり、挫折した夫の頭を軽く撫で回し、徐々に回復させるのである。次の個所は彼女の"breaking through"を描写している。

> As Katherine stood in the doorway, a feeling she had never experienced crept into her. She did a thing she had never contemplated in her life. A warm genius moved in her....
>
> Katherine stroked his head gently and the great genius continued to grow in her. She felt larger than the world. The whole world lay in her lap and she comforted it....
>
> Suddenly the genius in Katherine become power and the power gushed in her body and flooded her. In a moment she knew what she was and what she could do. (pp. 33－34)

夫の挫折を目撃し、不死鳥のように立ち上がったキャサリンの力添えで「シャーク」は元気を取り戻し、「天の牧場」から出てもう一度再出発をする決心をする

のである。

非目的論的思考及び“breaking through”の概念に関して、スタンベックに影響を与えたと言われている海洋生物学者リケッツが、*The Outer Shore* の Part 2 “Breaking Through”の中で、スタンベックの『天の牧場』の中にも“breaking through”の概念があると言及しているのは注目に値する。（注５）その発言は、『天の牧場』の主題と構成を検討する場合のヒントを提供してくれる。スタインベックがリケットの影響を余り受けていない頃から、彼の中に“breaking through”の概念が芽生えだしていたのである。

第３章の「エドワード・ウィックスの物語」の後半で僅かではあるが“breaking through”の概念が虚構化されている。これを敷衍すれば、この小説全体を統一しているテーマも“breaking through”の概念に結びついたもの、つまり幻想の壁を突き破って現実に到る瞬間をドラマ化することであり、個々のストーリーは「天の牧場」と言う「潮だまり」に生きている住人たちの運命の転変をドラマ化しているのである。スタインベックは読者にこれらの映像を垣間見させることによって、自然と人間、個人と社会の問題、つまり全体像への“breaking through”を体験させることをねらっていることがわかる。読者は、「潮だまり」のような「天の牧場」から目を転じて「アメリカの夢」と現実を直視することを迫られているのである。

第６章の「ジュニアス・モルトビーの物語」では、そのことが一層はっきりした形で現れてくる。ここで問題になっているのは、単に幻想的［ロマンティック］な生き方の挫折だけではなく、そのような生き方に対する凡庸、且つ上品な人々の反応の仕方である。スタインベックは、モルトビーのロマンティックな生き方に共鳴しつつも、風刺的筆致で描き上げることによって、客観性、つまり非目的論的思考を維持している。

ジュニアスは教養のある家庭に育ち、立派な教育も受けていたが、父親が破産してからは、サンフランシスコで10年間書記の仕事に埋没していた。35歳を過ぎたある日めまいをし、息切れをしたことから、肺疾患であることが判明し、「天の牧場」に転地療養にやって来る。そしてクエイカー（Quaker）夫人の家に下宿することになる。クエイカー夫人には２人の息子がいるが、彼女は未亡

人である。「天の牧場」の気候がジュニアスの身体には適していて、たちまち健康を取り戻すのだが、快復期間中に10年間で染みついた仕事をする習慣はすっかり捨ててしまい、日々を読書と思索で過ごすようになる。彼は、静かで平和な生活を満喫する。クエイカー夫人が周囲の噂を気にし、2人が結婚することを仄めかすとジュニアスはすぐに承諾し、彼女と結婚する。

結婚後も彼の生活様式は少しも変わらない。「天の牧場」の盆地や農場は好きだが、そのありのままの状態が好きなのであって、耕したり、植えつけをしたりしようとはしない。クエイカー夫人も、最初は彼に畑仕事をさせようと努力するのだが、悪気のない無抵抗の抵抗に出会ううちに何時しか彼女も無頓着になってしまう。かくして、モルトビー家は貧乏神にとりつかれ、見すぼらしい生活をするようになる。

1917年2人の息子たちがインフルエンザの伝染病に同時に感染し、栄養失調も重なって死んでしまう。クエイカー夫人はお産が迫っており、閉じ籠もっていたのでそのことを知らなかったし、彼女自身お産で死んでしまう。2人の息子の死、クエイカー夫人の死、及び自分の息子ロビー（Robbie）の誕生と養育をめぐって、「天の牧場」の住人たちの間で囁かれているジュニアスの奇異な行動に関する噂には幾分誇張もある。しかし、実生活に関する彼の無知と無関心さは呆れるのを通り越して、ユーモラスな哀感さえ帯びている。赤ちゃんにミルクを与えるために、医師に勧られて購入する山羊に関するエピソードにはユーモアと風刺の入り混じったトーンがある。

山羊の持ち主から購入の目的も告げずに山羊を買ってきて、乳袋が見つからないので、飼い主に「これは正常な山羊かね」と真剣な顔で問うたり、雌の山羊と取り替えてきてから2日間かかっても乳を搾り出すことが出来なくて、あげくのはては山羊に欠陥があるものとしてそれを返そうと思ったりする。「天の牧場」の住人の中には赤ちゃんを山羊の下に持っていってミルクを呑ませたんだと主張するものさえもいる。しかし、それは噂にすぎず、語り手も“this was untre”(p. 69) と否定している。

かくして、ロビーはジュニアスのもとで屈託のない自然児として成長することになる。貧乏でぼろは纏っているが、何時も父親から、歴史上の話や小説の

物語を聞かされ、大人同様に扱われて一緒に話の仲間に加わって育ってきているので、物知り坊やになっている。このストーリーでの主題は、このような環境で育った子供に対する社会の介入に端を発し、自然と調和したシンプルなライフ・スタイルが脆くも崩壊することにある。

モルトビー家の自然と調和したシンプルなライフ・スタイルは、「天の牧場」の住人たちには受け入れがたいものであり、特に彼らの価値観と対立するロビーの存在は、自分たちの子供たちに悪い影響を与えるものであると考えている。「天の牧場」の体面を重んずる人々は、ロビーが学齢に達し、学校に通うようになるのを待ち構えてロビーに衣服や靴を送ることで介入してくる。それは教育委員会の決定に基づいたものであり、またその贈り物をするのに主体的に関わる人物、マンロー夫人の行為は純粋の慈善精神から出たものであるので、必ずしも責められる性質のものではないかもしれないが、否、それだけに一層問題が残る性質のものである。この行為がロビー少年の心を深く傷つけてしまい、ジュニアスに「天の牧場」を去らさせる決意をさせるのである。

"I think his health is more important than his feelings."(p. 86) と主張するマンロー夫人にはロビー少年の心も、モルトビー家の自然と調和したシンプルなライフ・スタイルの中にある価値も分かろう筈はない。社会的な弱者に対する横柄な慈善行為の押しつけは、相手の心に対する無神経さの現れであり、広く文明社会に巣くっている病根であることをスタインベックは衝いているのである。

しかし、スタインベックが問題にしているのはそのことばかりではない。このような現実に直面した時のジュニアスの対応の仕方にも関心が払われている。現実的世界よりも想像の世界に関心を向け、個々の事実よりも全体像を模索しようとしているジュニアスの生き方は、ある意味ではスタインベック・ヒーローの特質を持っているように見える。しかし、それは表層的な類似にすぎず、ジュニアスが風刺的に描写されていることからも分かるように、スタインベック・ヒーローになるには弱い面がある。ロビーのことで、自分のこれまでのライフ・スタイルを簡単に捨てて、またサフランシスコに舞い戻る姿は何か物悲しく、挫折を感じさせる。あるいは、そのような結末が『天の牧場』の各ストーリー

に共通したものであることを考え合わすならば、当然の結末であるかもしれない。

壮大な夢の挫折を扱っている第11章の「ホワイトサイド家の物語」が9つのストーリーの締め括りとして最後を飾っているのは全く当然であると言えよう。「アメリカの夢」を実現するために西部にやって来たリチャーズ・ホワイトサイド（Richard Whiteside）が500年も続く王朝に匹敵すべく築き上げた大邸宅が2代目ジョンの時代に火災で消滅してしまうのである。火災は没落のフィナーレを象徴している。リチャーズの壮大な夢の実現は妻アリシア（Alicia）の聡明な援護にもかかわらず、当初から崩壊の運命を宿している。先ず、2代目ジョンが父親ほどにはそのような生き方に熱心でなくなるし、3代目ビルの場合は農耕よりはむしろ車のビジネスに関心が移っている。その上、マンロー家の娘メイと結婚したら、この大邸宅を出て都会に住もうと決めている。火災はこれらの内的崩壊に止めの打撃を与えているにすぎない。

人間の犯す過ち、つまり自然に調和した生き方ではなく、自然に人間の意志を刻み込んで自分の不滅性を誇示しようとすること、それがいろいろな悲劇の原因であり、自然、社会そして環境とのバランスのとれた生き方を阻害する要因であることが『天の牧場』の個々のストーリーのヒーローたちの生きざまから浮かび上がってくる。「ホワイトサイド家の物語」には、確かに、「アメリカの夢」の虚しさとその挫折が意図的に、且つ効果的に織り込まれていると見てよいだろう。

リチャーズ・ホワイトサイドの祖先は、ニュー・イングランドで3代に亘って生活していたが、彼が幼少の頃火災に見舞われている。彼は、「ゴールド・ラッシュ」で名高い1850年頃カリフォルニアへやって来て、「天の牧場」に永住の地を見つけるのである。ホワイトサイド家には代々子供が一人ずつしか産まれてこないというのも偶然の一致だが、火災に関しても「歴史は繰り返す」と言う諺どおり、何か人間の力では予見できない運命の力を感じさせられる。この「呪い」、運命的なものに対抗するかのごとく、リチャーズは大邸宅を築くのである。

リチャーズの「アメリカの夢」は、2代目のジョンの時代に早くも崩れかかる。ジョンは「天の牧場」で教育委員会の事務局を引き受けたり、その住人た

ちの信望を一身に受けている人物ではあるが、リチャーズの抱いていた壮大な夢を引き継いでいく野心は既に薄らいでいる。既に「アメリカの夢」の崩壊の兆しは見え隠れしているのである。3代目のビルの生き方にその崩壊ははっきりとした形で読み取れるのである。ビルは、もはやリチャーズやジョンたちの夢を継承していくことに興味もないし、その意志もない。リスカも指摘しているように、ホワイトサイド家の大邸宅がビルを「天の牧場」から連れ出していこうとしているマンロー家の娘メイの父親によって、偶発的に消滅させられることはアイロニカルであり (p. 42)、現実の前に脆くも崩れていく「アメリカの夢」の虚しさを象徴的に表しているのである。

ジョンにホワイトサイド家の屋敷にある藪の野焼きを提案したのはバート・マンローであるとはいえ、彼につきまとっている「呪い」の疫病神が火災を起こしたと考えるのは滑稽であり、妥当ではない。藪の野焼きの火は一陣の突風の悪戯であった。既に崩壊の兆しのあった夢［幻想］に最後の一撃が加えられるのである。火災で消滅した大邸宅の廃墟を見ながら、ジョン・ホワイトサイドはマンローに言うのである。

> "Well, that's over.... And I think I know how a soul feels when it sees its body buried in the ground and lost. Let's go to your house, Bert. I want to telephone Bill. He will probably have a room for us." (p. 179)

このジョンの発言の中に、現実の前に脆くも打ち砕かれた夢［幻想］の実体を見ることができるし、現実を受け入れようとしているジョンの姿には、痛ましいながらも一種のカタルシスのようなものが漂っている。

V

夢［幻想］と現実のコントラスト、夢［幻想］の中に己の生を実現しようとしている人々の虚構の生活、そして淡い夢［幻想］の中に生きている人々の中

に容赦なく入り込んでくる現実、これら一つのテーマの変奏が『天の牧場』の9つのストーリーで奏でられている。序章及び終章における離れた距離からの眺望は夢［幻想］としての「天の牧場」を提示しており、9つのストーリーのそれぞれで「天の牧場」の住人たちの夢［幻想］の崩壊を描くことによって、夢［幻想］と現実のコントラストが浮かび上がるように構成されている。特に、9つのストーリーで語られている「天の牧場」の住人たちの夢の挫折と「天の牧場」からの追放を見てきた読者にとっては、終章の観光バスの乗客たちの「天の牧場」についての夢［幻想］はアイロニカルであり、エデンは夢［幻想］にすぎないことが痛感させられる。

9つのストーリーは、それぞれ完結した一つの虚構の世界を構成していながら、『天の牧場』の中では全体の一部として存在し、読者は常に全体像を捉えるように構成されている。マンロー家の人々及び彼らが「天の牧場」の住人たちにもたらす「呪い」は外的要因であり、「天の牧場」の住人たちの夢［幻想］の崩壊は彼ら自身の生き方の中に内在しているのである。その「呪い」は“a moment of truth”を垣間見させる役割を果たすこともあれば、自然のリズムに従って平穏に生きている人々に文明悪と言う現実を押しつけることもある。あるいはまた人間の虚しい壮大な営みに対して運命の輪としての役割を果たす場合もある。それぞれ異なるように見えながら、実は、その「呪い」は夢［幻想］から現実に醒める時に介在してくるものであることがわかる。

夢［幻想］から現実に醒めるチャンスがありながら、その夢［幻想］が打ち破られてもなお夢［幻想］の中に引き籠もる者、現実から逃げ出す者、あるいは現実に打ちのめされる者で「天の牧場」は充満している。第3章の「エドワード・ウィックスの物語」においてだけ、ありのままの現実を受け入れ、希望を持って生きていこうとしている姿勢が見られる。しかし、そこにおいてさえも、事象の全体像へ“break through”するのは妻のキャサリンであり、彼女の介添えで「シャーク」は立ち上がる勇気を取り戻すのだ。従って、「天の牧場」の住人たちの殆ど全ては自らの力で「潮だまり」から這い上がることはできないし、たとえ「天の牧場」から出ていくにしても、また同じような「潮だまり」に入っていくだけである。「潮だまり」から這い上がるのは読者なのである。

Notes

1) スタインベックの最初の妻キャロル (Carol) と広告代理店の仕事を一緒にしていたベス・インゲルス (Beth ingels) と言う女性は、『天の牧場』の虚構の地名のモデルとなったコラール・デ・ティエラに生まれ育ち、本人自身も *Winesburg, Ohio* 流に若い女性の人間的成長に影響を与える奇怪な人々の話をいつかは書くつもりでいたものを、スタインベックに時々話して聞かせたと言われている。スタインベックが彼女の話から何をどれだけ借用したかは不明であるが、その場所が「潮だまり」に似ていて、小説空間としての可能性を見出し、「天の牧場」として元の地名にアイロニカルな響きを与えていたのである。cf. Benson, pp. 208－10.

2) John Steinbeck, *The Pastures of Heaven* (New York: Bantam Books, 1956). 以下、本文中における引用はこの版による。

3) cf. Richard Peterson, pp. 88－90.

4) 「呪い」を撒き散らすマイナス・イメージとしての役割から一転して「真理に直面させる」プラス・イメージの役割の解釈は、マンロー家の役割の多様性を示唆していて、批評の奥行きと難しさを感じさせる。この論考での私の解釈はフォンテンローズの延長線上にあるが、ストーリーによっては必ずしも同じではない。

5) リスカの分類方法は、『天の牧場』の主題と構成を検討するにあたっては、明晰であり、便利であるし、また私が検討しようとしている 3 つのストーリーと他のストーリーとの関連性を見ていくのに都合がよい。cf. Lisca, pp. 64－70.

Works Cited

Astro, Richard. *John Steinbeck and Edward F. Ricketts: The Shaping of a Novelist.* Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1973.

Benson, Jackson J. *The True Adventures of John Steinbeck, Writer.* New York: The Viking Press, 1984.

Bracher, Frederick. "Steinbeck and the Biological View of Man." *Steinbeck and His Critics: A Record of Twenty-Five Years.* Ed. E. D. Tedlock, Jr. and C. V. Wicker. (University of New Mexico Press, 1957), pp. 183-196.

Fontenrose, Joseph. *John Steinbeck: An Introduction and Interpretation.* New York: Barnes & Nobles, 1963.

French, Warren. *John Steinbeck.* Twayne United States Authors Series, no. 2, 2nd rev. ed. Boston: Twayne Publishers, 1975.

Hedgpeth, Joel W., ed. *The Outer Shore, Part 2: Breaking Through.* Eureka, California: Mad River Press, Inc., 1978.

Hughes, R. S. *John Steinbeck: A Study of the Short Fiction.* Boston: Twayne Publishers, 1989.

Ingram, Forrest L. *Representative Short Story Cycle of the Twentieth Century: Studies in a Literary Genre.* The Hague: Mouton Press, 1971.

Lisca, Peter. *The Wide World of John Steinbeck.* New Brunswick, N. J. : Rutgers University Press, 1958.

Peterson, Richard F. "The Turning Point: *The Pastures of Heaven* (1932)." In *A Study Guide to Steinbeck: Handbook to His Major Works.* Ed. Tetsumaro Hayashi (Scarecrow Press, 1974), pp. 87-106.

Steinbeck, Elaine and Robert Wallsten, eds. *Steinbeck: A Life in Letters.* New York: The Viking Press, 1975.

Steinbeck, John. *The Pastures of Heaven.* New York, Bantam Books, 1956. (Originally published by Brewer, Warren & Putnam, 1932).

—— ABSTRACT ——

The Pastures of Heaven: Awakening from Illusions

Kozen Nakachi

John Steinbeck's third novel, *The Pastures of Heaven* (1932) is often criticized as "a group of loosely connected stories," or as "the most loosely knit of any of Steinbeck's novels." But since Forest L. Ingram in his *Representative Short Story Cycles of the Twentieth Century: Studies in a Literary Genre* (1971) discussed it as a "short story cycle," there has been a new trend toward the reevaluation of its structural and thematic design. So, my main concern, in this paper, is to combine the "short story cycle" interpretation with Steinbeck's "non-teleological breakthrough" positoin.

It is surely instructive to note that Edward F. Ricketts in *The Outer Shore*: Part 2 "Breaking Through" points out that there is a "breaking through" concept in *The Pastures of Heaven.* But his mention here is limited only to the third tale or "Edward Wicks Story." I am going to adapt the idea and develop it to the extent that I might say that Steinbeck's "non-teleological breakthrough" position is embedded in the structure of *The Pastures of Heaven.*

With Ingram's "short story cycle" interpretation and Steinbeck's "non-teleogical breakthrough" position in mind, it is clear that Steinbeck recounts a variety of episodes about those who have lived happily with their own dreams or illusions but are defeated or disillusioned by the "Munroe family curse." On the other hand he makes the readers aware of their own dreams or illusions and wants them to accept the situation of the unrealized "American Dream" and to learn how to come to terms with it.